

眞 生

第九卷 第九號

- 愚夫必ずしも愚ならず、賢人必ずしも賢ならず、之はたゞ世間から見た一般の見方にすぎない。
- 金をもうけることのうまい人が賢人ならば金もうけのへたな人は愚人であらう。學問のできる人が賢人ならば學問のできない人は愚人にちがいない。
- 乍然學問はよくできるが金もうけは一向できない人があつたり、金もうけは非常にうまいが學問の方は一向にできない人があるのはさうしたものか。
- 世には悪いことをする人が必ずしも愚人に限らず、そんな人に限つて、随分と理智にたけた人があり、随分愚夫愚婦と思へる人に反つて正直な人もある。
- して見ると金もうけには非常に考への足らない愚人でも、學問の方には非常にできる賢人もあり、學問にかけては非常にできぬ愚かな人でも、道徳の上に非常に優れた賢人もあるのは必ずしもあり得ないことではない。
- 而も、かうした場合、果して何れが賢者であり、愚者であらうか。
- 此の意味に於て、金をもうける智慧はなくとも、學問のできる才はなくとも、自ら進んで佛たるべく、一向專修の念佛者は愚者必ずしも愚者ならずと云ふべきではないか。
- それと同時に、いかに學問の才があつても、金もうけの智慧があつても、眞に生るべき念佛の聲なき人は賢人必ずしも賢者ではない。
- 愚夫愚婦の念佛もこゝまで至れば正に眞人の生活である。（念）

活生の『上』

目次

「上り」の生活 魁子

法然上人の

「求められたもの」

土屋親道

念佛の種々相

土屋親道

吾朋便り

▽私の附近の長屋では、此頃滅切り喧嘩が殖えました。而かも喧嘩といふと仲々烈しい喧嘩をやります、それといふのも先月から自立つて皆が職が無くなり大の男がブラ〜と遊んで居らんならぬので、従て金廻りが悪く、心がムシヤ〜してならぬので、一寸した事にも衝突して喧嘩になるのです。

▽金が廻はらぬ、衣食に事缺くといふと共に、此の魂ひまで、損じ傷つて行く事は堪えられぬことです。「本願寺の御台所」と謂はれる此の地方では、ごんな貧乏屋でもお佛壇の無い家はありませんがそれが此頃は、心が面白くないから御まわりもしたくないと皆云つて居ります。夜になつても御詠歌の聲も、御蘇教の太鼓も聞えなくなりました。

▽貧乏と無宗教、無宗教と闘争主義が僅かながらも事實として此貧乏長屋にもよく見えます。

▽人間は腹が減るに狂ひ出します。腹が減ればへる程、ますます真剣に努力して行けると云ふのは、信念、節操の有る者の云ふことで、普通の人間は油が切れたら正しい方へ進むどころか、脱線してハツ當りするより仕様がありません。

▽マルキシズムが宗教に反対して立つよりも、宗教がマルキシズムの立場をも含めて立たねばならぬ時代だと思ひます。宗教が斯かる本質と實行とを持つた時代は、必ず宗教として眞生命と眞價があつた時代で、然らざる時は、宗教の「形骸」のみ存する時であります。

(魁)

□好きな事は、いくら失敗しても、苦しい目に逢つても厭やにならぬものです。厭やになるのはまた本當に「好き」になつて居らぬからです。

□ソレハ當り前の事だが、此の本當の「好き」には仲々なれぬものです。

□感情一片の「好き」は、直々嫌ひになります。なぜか云ふと其好きの標準が、一時的感激である場合が多いから、其利那が過ぎると、すぐ好きでナイ情態になるのです。だから、いつまで経つても好きだ、困難にぶつかれば打つかる程、ますます好きになるといふのは、單なる感情的であるのでなく、もつと深いものであります。此の深い堅固な「好き」になることが人生の幸福であり、救ひであるように思ひます。

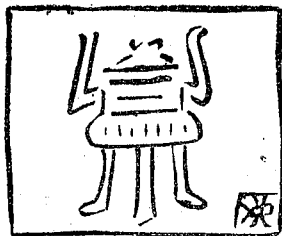
□自分の全身全靈をぶち込んで居る事であれば必ず感情で少々嫌ひだ—と思つても、智的に意的に其「好き」の中心を教へられるから、少々な感情を殺して努力します。だからますます好きにこそなれ、嫌ひだ—などと思ふのは、自分の懈怠して来たからだ、自分を鞭打ち、自分を叱つて精進します。

□商賣やつてゐても、勤務してゐても、或は職人、百姓をしてゐても、船乗りや坊さんをやつてゐても、やつてゐる事の中に「好き」を見出し、自分の活きてゆく天地が認められて来た、最早や單なる「金儲け商賣」ではありません。大きく云へば藝術的、宗教的生活であつて、それが本當の「生き方」であります。

□今のまゝが完全な、十分なものであると思はぬけれ共、十分なものでナイとよくわかればわかる程、一層「良いもの」にしたいたと思ひ、死者狂ひに努力するのであります。だからその人の商賣には活氣があります、進歩があります。其人の作品、其人の生活には改まりがあります、新鮮味、創造味があります。

□恰度暗の空へ打ち揚げられた火花が、開らかうといふ力一杯で、空へ昇つて行くように、勇氣と希望に充て上つて行きます。昇つて行くのが信仰であつて、降つて行くのは死であります。降つて行くとは、「ア、こんな事をやつてゐてもツマラヌなあ」といふ感傷であります。私達の生活が、今「上り」の生活であるか、「下り」の生活であるか。不發のまゝ、下つてゆくのを、未發のまゝ、上つて行くのまゝは、姿はよく似てるが、内容は非常に違ひます。

□願くば前途に理想を持つて、足元を常に改造してゆく、「上りの生活」でありたいと思ひます。(魁子)



法然上人の「求められたもの」

土屋 觀 道

一、史的觀察

□上人の求道はいつ頃から始まつたものでありませうか、御傳によれば生れ乍らにして己に之を求むるの心に強くあらせられたやうに書かれてあります。然し、本當に上人が自身に道を求むるやうにいられたのは十八才の頃からではないかと思ふのであります。

□何となればそれ以前の上人はあまりに求道と云ふことに強くあらせられなかつたやうに拜せられるからであります。而も上人の一生に於て、それまでの生活は私共に對しても餘り参考となる點もないのであります。

□乍然上人が何故に道を求むる心になられたかは、そこに可なりの原因があるのであります。そしてその原因を尋ねればそれは上人が比叡登山の後三年法華の三大部の研究によると云はねばなりません。

□然に世の多くの人々には上人の求道を上人九才の年の父君の遭難におき人生の無常をそれによつて強めやうとする人もありますが、それは單なる上人の無常觀でありまして、未だ眞實の求道時代とは

云へぬのであります。從てそれまでの上人の生活は所謂世俗の無常觀にすぎないもので、同じ佛教を信ずると申しましてもそれはたゞ單なる世俗の佛教信者に過ぎなかつたのであります。

□從つて此の事は上人の實際にも現はれてゐるのであつて、上人が登山後出家薙髮の時上人は直に此の世を隱遁して亡き父上の菩提を吊らうとせられたと云ふことでも之を知ることができるのであります。即ち此の時の上人の隱遁はたゞ世の無常を感じて出家隱遁して亡き父上の菩提を吊うには所謂亡き父君への讀經でもするのがその道に盡すやり方でも思はれてゐたのでありまして、未だ上人自らの人生に對する疑問も無ければ所謂佛教の眞實の解脱も當時の上人には其の要求がなかつたと云はねばなりません。

□して見れば當時の上人、少くとも薙髮當時の法然上人には未だ眞實に道を求むるの心は發生してゐなかつたと云はねばなりません。否一步を譲つて、上人の内心には己に此の俗事にあきたらず、少くともさうした世間の生活を離れて、深く山間にかくれて亡き父君の菩提を吊はうとせられるところに所謂求道の心がひそんでゐるのだと申せば申せないこともありませんが、乍然それはまだ此の世を厭ふと云ふ單なる厭世の一面に過ぎぬものでありまして、眞に道を求めるの求道の時代とは云へぬのであります。

二、上人の求道

□然に上人は師の勧めによつて、法華の三大部を讀まれるに至つて、初めてそこに求道の心が發生して來たのを見るのであります。而も其の求道たるや己に法華の三大部を閲讀せられた後の求道でありますから、其の求道の何者であるかと云ふことも、普通一般の求道の意味とは異つてゐるのであります。

四
□此のことは特に私共が上人の求道について心得て置かねばならないところではありますが、そこには又上人が佛教の中でのいかなる點について、何を求められたかをも明になることができるのであります。

□中でも上人が眞劍に道を求めて、その解決に心を痛め初められたのは上人の廿四才以後ではなかつたかとも思へるのでありますが、上人求道の眞劍さは特に此の頃よりはげしくなり、ごこまでも自分自身の解脱の眞道を求められたかの感があります。

□尤も十八才以後の上人がそれ以前に比して一層明確に求道の方面に轉回せられたのは事實でありませんが、二十四才までの上人の求道は主として従來の既成宗教によつて解脱を得んとする方法でありまして、就中法華經を中心とする天台の教行の研究がその主なるものであります。

□乍然上人の求道は單なる理解の満足によつてのみ承知せられるものではなかつたのであります。従て上人の求められるところはあくまでその教行の實証であつたのであります。従つて従來の三大部のみでは上人として未だその實証を得ることができなかつた爲めに、更に上人の研究は天台以外の研究にも其の道の研究を進められたと見るべきであります。

□此の頃から上人の求道は其の佛陀の究竟地にどうしたなら到達することができらうかと云ふことを自分實際生活の上に反省して、之を得ることにつとめられたことが思はれるのであります。而もその中で上人の眞にもだへられたのは釋尊の教へに於ける疑いの心ではなくして、之を修するの力に堪えない自分を發見せられたことにあります。

□従つてそこには今までの人の殆ど誰れでもが気づかなかつたほどの一大苦悶であつたと云はねばなりません。何となれば今までの多くの人々は従來の教説に従つて、曲りなりにも自分は修行してやがては解脱ができるものだと思つておつた人が多くであつたのでありますから、そこには自分の解脱

を不可能だなど苦悶する人は恐くなかつたからであります。

□否、其の實は之を史實に徴すればそれよりも己に四五百年も以前に於て、支那に於ては早くも此の事を發見して、其の機に應ずる隋の信行、唐の善導などが三階教や淨土教を開いて之を説き、我が國でも惠心僧都が上人よりも三百年も昔に己に其の道を説いてゐたのでありますから、其の事が無つたとは云へぬのであります。

□乍然之を法然上人の時代に於て考へて見れば未だかうした考へが一般民衆の上に行はれてゐなかつたことだけは事實であります。従つて、上人が所謂自ら聖道門的解脱の方法を構せられたがそれによつて、一つも自らの豫期する道が開けぬので此の外に我等如きの下愚の身のたやすく救はれる方法があるのではないかと多くの人にその道を求められたのであります。

□従つて、同じ求道の上にも上人の求道は正しく此の第二の求道をこそ眞の求道と云ふべきであります。即ちそれ以前の求道も亦一つの求道には違ひないのであります。之を聖道門の求道に比べて、更に一段の轉回であると云はねばなりません。

三、理想と現實

□之を別な言葉で申しますならば上人の求道は従來の聖道門的求道に對する一大革命の宗教と云つてよいのであります。即ち従來の佛教殊に所謂従來の聖道門的自力の佛教は人生の理想を成佛に置いて之を獲得すべく戒定慧の三學を修するの一般の常でありました。

□従つて、そこには佛教の理想が直に人生の理想と一致して永劫に之を實行して行けばよかつたのであります。従つて、そこには佛教修行者には我こそは宇宙の眞理を實行し、人類の最高の生活に自らを置くものなりとの眞實の喜びも之に伴ふものがあつたのに異いありません。

□然に一度自分の實力を反省し、それが實際に於てどこまで毎日實現せられつゝあるかを省みて、そこに何等の進歩も實行も伴はれて行かぬことを自分自身に發見した眞實の求道者には恐らくは之ほどの失望はないでせう。『世はそらごとたわごとまことあることなし』と叫ばれた親鸞の言葉は最もよくこのことを言現はしてゐるのでありますが、『三學の一つもたもつことのできない法然、十惡五逆の此の私がどうしたならば本當の解脱ができるであらうか、若しもそれが見つからないではとても自分は永久に助かることのできない身である』と自分の將來に對する恐ろしさを痛感せられてゐる法然の求道こそは實に眞劍そのもの、叫びと言はなければならぬのであります。

□此の意味に於て、上人の求道は己に聖道門的修行の方法に絶望せられた上での求道であつて、今と云ふ人達が自分勝手な要求を充たしさへすればよいと云ふやうな誤つた宗教の求め方ではなかつたのであります。

□更に別な言葉を以つて之を現はせば上人の求道は其の目的に於て、聖道門と同じであり、其の方法に於て聖道門的方法では自分の力が之に應ずることができぬと云ふのであります。即ちそこには理想と現實との矛盾の生活を深く發見せられたと云ふべきであります。

□即ち理想高きにかゝはらず實行之に伴はずと云ふ現實の悲哀であります。従つて、上人の求道は理想なきにあらずして、理想高きにかゝはらず實行之に伴はずと云ふ眞刻なる求道の生活であつたのであります。此の點は單に今時の人々が自らの爲すべきところも知らずして、たゞ人生に悩むとは可なり相違する點であります。

四、求道の要點

□此の意味に於て上人の信仰は己に淨土教への入信已前、可なりに強い一つの信仰があつたとも云へ

るものがありました。而てそれは今時の單なる求道者と上人の求道とが大いに異なることでもあります。

□即ち上人は此の點に於て、己に佛教を止しきものと信じてゐられました。そして、今日の現存經典を悉く佛説と信じ、又釋尊を經説そのまゝの佛の如き佛と信せられてゐるばかりでなく、釋尊以外にも經典に示すやうに無數の諸佛諸菩薩の實在をすなほに信じてゐられたのであります。

□従て、上人の求道はそれらに對する疑問とか不信とか云ふものではなくして、寧ろそれらによつて教へられたる通りに之を實行せんとして、其の實行のできないところに、上人の求道はあつたのであります。

□かくの如くして、上人の求められたる宗教は、凡夫解脱の方法即ち凡夫の成佛にあつたのであります。而てそれは正しく淨土教の發展、淨土教の展回を意味するものであります。即ち戒定慧の三學を修することのできない末世下根の凡夫が三學によらずして、たやすく解脱のできる方法を求められたのであります。

□尤も智慧第一の法然房、深廣の法然房として、學徳共に當代に冠たる上人のことでもありますから、上人にして、如來の本願や、他方淨土への往生を御存じないわけでもないのであります。それにしては何故に上人はそれによつて早く信仰に入ることができなかつたのでありませうか。此の點は私共の特に注意を要するところでもあります。

□乍然上人の御心が他力往生の信仰に傾きかけて來られたことは、一切經閱讀の當初に於てなかつたことは確かであります。それは己に一切經を閱讀の際善導の御疏も他の藏經と共に五度もくりかやされてゐるのにかゝはらず、思いが未だそこにまで到らなかつたと云ふことは此のことを証して明かでありませう。

□然にそれはそれとして、上人が善導の御疏に特にお目を通されるやうになつたのは我が國の惠心僧都の往生要集によつてあることは上人の御言葉として明に傳へるところであります。即ち上人は惠心の往生要集によつて、善導の御疏を改めて見る。こと三遍、前後八回に及んで始めて其の信を得られたと傳へて居ります。

□然は其の信とはいかなる信でありませうか、即ち上人をして眞實の信仰に入らしめたもの、中心は何であらうか、又それと同時に上人をして色々と迷はしめたものは何であらうか、少くとも上人は一切經讀破の方である、而も五度もそれを繰返されて居り、たゞ題目を見ただけでも略その本の大意を伺ふことができる。自ら云はれてゐる上人がどうして二十六年の間も専心求道にいそしみ乍ら其の念佛の信仰が確立しなかつたのでありませう。

五、凡夫往生の疑い

□之は主として、上人が凡夫の報身報土に對する疑念が充分に晴れなかつたが爲めではないかと思ふ點があるのであります。何となれば上人が天台の教行に其の信を置かれる限り、上人の信仰は念佛の信者となることができぬからです。而も念佛の信者となれない限り、當時の天台の教へでは凡夫の報土往生は許されぬからであります。このことは己に天台では色々と云いつくされてゐることでありまして、彌陀の淨土は凡聖同居土と申して眞の報土ではないとするからであります。

□然は天台の立場から申せばいかに凡夫とは申せ凡聖同居土の淨土では満足ができないので彌陀の淨土に往生する氣にはなれないのが本當であります。従つて之によつて上人が彌陀の本願なり、彌陀の淨土なりがあることも知り乍ら之が信せられず、又念佛稱名によつて彼の土に往生のできる位のことを御存じであるべきにかゝわらずその信仰の入ることのできなかつた理由も明に知ることができやうです。

うです。

□然は天台の云ふやうな報身報土の世界へ罪惡生死の凡夫が此のまゝで往生のできる道があるであらうか、三學（戒定慧）を修して解脱を得るの道があることは百も承知であるがそれでは自分のやうな下機の者には到底達し得らるべくもないとそれが上人の悩みであり、又求道の要點であつたのであります。

□尤も法相宗の云ふところに従へば彌陀の淨土を報身報土と云ふのであります。乍然その報身報土は凡夫の往生を許さぬのでありますから之また上人の本心の要求ではありません。即ち上人の願いは罪惡生死の凡夫が此の身のまゝで報身報土の極樂世界へ眞に往生のできることを求められたと云はなければならぬのであります。

□此の意味に於て惠心僧都の往生要集は其の説くところ非常に上人の心を動かすものが多かつたと思はれるが、それにもかゝらず上人が其の説に満足することができずして、善導の御疏によつて信を開かれたと云ふことはたゞ一に念佛に對するかゝる見解の相異によると言はなければなりません。

□即ち上人は念佛に三種の念佛をあげて、一には天台の摩訶止觀の念佛、二には惠心の觀念の念佛、三には善導の口稱の念佛とせられてゐるところ、少くとも上人の心には惠心の念佛が口稱一行の本願の念佛と見えなかつたのでありませう。

□否、惠心の念佛と雖も全々口稱の念佛でないとは云はれぬ點もありますが、そこには口稱と觀念とが一つになつてゐるかに見えるところが多いのと、その區別が判然しないところがあります。此の意に於て、善導の念佛は明に是等の諸難を悉く排撃して一に報身報土への凡夫の往生を主張せられてゐるのであります。

六、念佛往生の疑い

□尙一つ上人求道の中心とも思はれるものは其の報土往生に對する業因の問題ではなかつたかと思へる點があります。それは三學の行業を修むることのできない衆生が淨土に往生するにはいかなる方法によるかと云へば今日の淨土宗から云へばたゞ念佛の一行によると云ふ外はないのでありますが、其の當時念佛にも色々の念佛があるが口稱一行の念佛が淨土往生の業因になるかどうかと云ふことについては上人には一つの大きいなる疑問であつたかに思へるのであります。

□何となれば口稱一行の念佛で往生のできると云ふことは己に善導大師の御疏の中にも云へることであり、又惠心の往生要集の中にも可なり見えるところでありますから、上人が幾度もそれらを御覽になつてゐながらそれを御存じないはずはないからであります。而もそれを知つてゐられながら尙その信仰には入られないのは何故でありませう。少くともそれには何か疑のはれぬものがあつたからだと云はねばならぬものがあつたからであります。

□而も此の疑いは古來念佛稱名を有願無行のものとして善導以外の人々には排拆せられてゐたからであります。

□従つて、上人がそれらの稱名生因の否定論者とまでは行かなかつたとしても、初めから直に善導の主張に共鳴せられ得なかつたものがあるだらうと云ふことは必ずしも否定できないことでもあります。而も上人が善導の御疏の「一心に専ら彌陀の名號を念じ時節の久遠を問はず念々に捨てざる者は正定の業と名づく、彼の佛の願に順ずるが故に」と云ふ文に到つて日頃の疑念立どころに晴れて念佛の一行に入られたと云はれてあるのを見ますれば上人の入信は正しく此の文句の中にあると申してもよいのであります。

□而も此の文句の中のごの點が最も上人をして其の疑心を晴したかと云へば、或る書には「順彼佛願故」と云ふところに至つてとありますから、何故に稱名位いの口業によつて往生ができるかとの三學と稱名との比較に至つて、それが「佛願」に順するからだと云はれるところに、その疑點が晴れたとすれば此の間の消息がよく伺へるのであります。

□此の意味に於て上人の信仰は己に入信以前に於て彌陀の本願や諸佛菩薩の信仰があらせられたことは充分に知ることができます。そしてまた上人の求道がいかなる点であり、上人の疑いのごの点であつたかも略今から伺い知ることができるかと思ふのであります。(一九三〇、六、四—五—八、五再校)

念佛の種々相 (其の五) 土屋 觀道

○それはまたごんな人々でありませう。

□それは外でもありません未だ眞實の人生を知らない人々を云ふ。世に生ける死骸と云ふのは即ちそのことである。徒に寺にまゐるも未だ人生の眞意義を悟らず、口徒に念佛を話せども、未だ眞實に如來を信ぜぬ輩である。

○然らば寺に詣らぬ信者とはごんな人々でありませう。

□それは如來を自分の心殿に安置して常に心から其の佛を合掌し、常に念佛してゐる故にことさら寺にまゐるの必要のない人々である。従つて其の人の生活は今や寺にまゐると云ふよりも、更に一步を現實の改造に踏み出し

た人々である。

○然るは念佛の話せぬ念佛の信者とはごんな人々でせうか
□念佛の話せぬ信者とは己に念佛の話する必要のないほごにまで念佛の進んだ信仰の人を云ふ、だから、念佛の話して、徒にその日を聽聞に費やさず更に一步を實際の生活にまで乗り出した人々である。

○然しそこまで未だ行けない人々には寺まゐりも亦止むを得ないでせうか。殊に未だ信仰に入らない人には念佛のお話も止めるわけには行きませう。

吾朋便り

○大垣 淺野寅次郎様

(前略) 例之腰折いつか餘白のある時御載せ頂く事の御言葉に従ひ左に御一報申上候

澁温泉にて 小栗利吉

澁の里出湯に今は浸りつ、

念佛稱ふる身の幸を思ふ

廣業寺に詣り十二光佛を禮讃して

全 人

廣業の御寺に詣り十二の

御名を讀ふることの嬉しき

澁にて 淺野寅治郎

よき人の仰せをうけて此の夏も

平穩の里を訪ふぞ嬉しき

温泉寺の朝の大鼓を聞きて

全 人

と、と鳴る大鼓に醒まされて

いそいで出てつ天然の湯に

温泉寺參詣者と語りて 全 人

温泉の寺の御佛の前に額つきて

御名を讀ふる事の嬉しき

天然の湯に浸りて詠める 全 人
天然の湯に浸りて大空に
響けとばかり高く念佛す

ほからかに稱ふる念佛ごだまして

三千世界共に動きぬ

天然の湯に浸りつ、秘かに思ふ

大悲の底のわたりやしやを

天然の湯槽の中に念佛すれば

深き恵みの身に溢る覺ゆ

高らかに御名を稱ふる我友の

姿を見れば佛なりけり

月を見て物の哀れを知るさいへ

われは大悲に逢ふ心地する

御名を呼ぶ聲に答へて禱の

いみしく聞こゆ澄み渡る聲

大空に輝く月も今宵こそ

天然の湯にわれさ浴みす

目洗の湯に浸りて念佛すれば 全 人

天地の心見ゆる心地す

温泉寺の門前に少年角力を見て 全 人

夕涼み御寺の門に集ひ来る

里の童の相撲見るかな

これ丈け讀みは致し候得共取捨下さる事は御自由に御座候我ながら其氣宇の雄大に驚き居り候 和歌としての價値はいざ知らず唯氣分丈けは讀み得たる心地存候 餘り多数に付此中から一首でも二首でも御載下され候も何れとも御心任せに願上候澁の實地を御存じ無之方々は恐らく誇大妄想に驚かる、外可無之と存候呵 十月の御面會が今より待ち遠しく存せられ候 合掌 (八月十六日)

○愛知縣半田 内田千代子様

御別時中はいろいろ御教導に預りまして一つ一つ身にしみてうれしく厚く御禮申上ます、早速御禮の御手紙をと思つて居ります内に早十日も過ぎてしまいました申譯ございません、どうぞして私共も澁へ参りたいと存じて居りましたが歸宅いたしましたら出にくく、残念ながら本年も御縁がございません。

定めて皆様御精進の内に楽しく御入浴の事と存じます。

此度は初めて父も御上人様の御教導を得てみつじりさ何ふ事の出来たのを大變よろこんで居られ、若い者が聞かせて頂

くに大變よいと會ふ人毎に話して居られます。

○沼津 辻つや千様 南無阿彌陀佛

さて此の程は唐澤以來又々東京にまで參上致し、すいぶん御厄介様になりました。誠にありがたうございまして。お上人様の御出立の前で御奥様には色々御用多き中をあれこれと御親切に御厄介様になりほんさうにすみませんでございまして。御邪魔いたしまして、お上人様の御話の中に、やつぱり私一人の考にては間違つて居りました點澤山ございまして事に氣づきました。私一人の行届かざるよりのすいぶん皆様に御迷惑かけます事と思ふ時、罪の深さに身がふるうのでございまして。お上人様の御言葉の意味よく明りました。御慈悲深ければこそかく迄の御親切な御注意ありがたうございます。

(中略) お別時中にごなたかのお話しの様に眞に道を求むる人さしてのよいお手本にならなければならぬと痛切に存じました。兎に角自分が眞物でない時その態度をみて誰が自分の話に耳を貸して

くれませう。內的に充實すれば自然外的にも現れるものとしてははじめて新らしい人とも共に歩む事の出来る様になられると思ひます。兎に角一生懸命精進致したい念願でございます。どうぞこの上共御指導の程御願ひ申上げます。

○朝鮮仁川 山口ふき子様

かねての御無沙汰何卒御ゆるし下さいませ。此度は唐澤山の御別時、山口氏も幾年かの思ひがかなひまして久々に御上人様にお目にか、られて無喜んで居られますでせう。私も腰を下つても参りました。ございましてが、本年までは叶ひませんでした。しかし安心して修行なされる様よく留守をいたして居ます。これが私のお別時でございます。

皆々様の御元氣で一生懸命の御修行の様が見える様でございます、そんな事思ふだに朝鮮に居まして、清い心にみたられて身心ともに喜びにみたされて仕事に勇氣が出来る様よく働けて居ます。

○厄ヶ崎 橋本信吉様

本年は一層の暑さを感じます様ですが御上人様には格別お障りもありませんか

平素存じながら御疎に過ぎて居ますが聊先生丈けの考から態のお便りは差し控へ居ます、不悪、御諒承願上ます。

往年初めて如來様の實体を御導き下さりましてより當時の概念のお姿の如來様に向つて合掌しながらも簡に實体如來様に融合的に精神即一を主として禮拜儀の御主意を祈禱して居りましたが、過般神戶極樂寺での御座談を拜聴しまして亦最初的神秘的な表象のお姿の如來様に一面念佛する事の必要を感じて茲に多少得る處がありました、而して昨今念佛に親しみを持つ御祈禱が出来ます様思はれます事を悦こんで居ます。尙此の上の御指導をお願申上ます。

○愛知縣半田 本多豊七様 南無阿彌陀佛

御上人様私も今までは度々御別時に參加さして頂きまして色々結構なる御話を承りましたが、今年の唐澤の御別時程私さして奥底まで感じましたことは始めてでございます。

又如來様の餘りにも偉大さには驚きました、又自己の餘りにも悪心にしていた

らぬ事に目覺めましたさきの悲みも同時に雲れる空が晴れ渡り、月の輝きが見える様になりましたさきの心持ちに變りましたのも、今年の御別時の否如來の御力の爲と思ひます。私のほんとうに合掌するこの出来ましたのは其の日からでした。

私の人生を一變させたのは實に今年の唐澤のわずか三日間の御別時でございます、私としての一生一代の記念すべき年で御座います、澁、温泉寺にてもしかりです。

色々の菩薩方に御指導を受け其の上へ御上人より御以頼受けし爲め吾々こそが心にも無い阿彌陀經と言ふ最も尊き經本を讀まして頂きましたこと、私はなんと幸福者であり又此のいやしき私をどこまでもお恵み下さい、我をばへこひと言われて居るのが有りありと見え聞えませんでしたの私は、唯々南無阿彌陀佛くくく合掌より外には何に言葉もございませぬ、又出来ませんでした。

私も餘りの喜れさまでこんな譯の分らぬことを長々書いてしまひました。

お許し下さい。
○大阪 高橋一郎様
謹啓 御別時中は有難き御法話奉感佩候御厚意により心かげながら入り難きものとのみ存じ居候 念佛の心願いさ、か相かなひ申候様被存明年も相叶はじなご心に期し下山いたし候事は誠に幸福の事に候 既に十年に及ぶ小生専攻經濟學はその理想に於て両親兄弟の愛情と相去る者の如く爲に當時煩はされ申候 前半生に至らざる心は讀書の好期に恵まれ候其の幸福をさへ不幸の如く憎み申候事も有之候 今日にして思ひ候へば多難なりしその讀書こそ三十才にして尙念佛を發心いたさせ申候ものか被存候

下山の當日御上人御法話の折前日夜半まで念佛仕候折失なひ申候念珠数を求めて兩人觀月堂に至り其徳念佛仕り候 唯今小生の佛に精進する縁は多々有之候も珠数を觀月堂にて失なひ候事も亦見のがし難き事と相感申候其節の如く念佛の出来得るものと結婚いたし申候喜びを深く有難く存じ候事は御座なく候き 延引ながら御禮申上度如斯に御座候今

後一層御指導と御鞭達奉懇願候 敬白
○名古屋 早川孝祐様より
南無阿彌陀佛
此程中は格別の御指導御配慮に預りまして誠に有がたうございまして厚く御禮申上ます。

御上人様此度のお別時ほど私が自分の心を深く見つめる事の出来ました事はございませぬ、そしてこんどは眞劍に修養させて頂きました事も御座いませぬ、衷心から感謝し合掌させて頂くので御座います。ほんとうに有がたうございまして。ほんの一寸したなやみの爲めに、すつかり念佛からわけ出されていらくする氣分を私はどうする事も出来なくなつてゐたので御座います。ほんとうにお恥かしい事ばかりで御座います、もう始めから終り迄お上人様のお話私の事ばかりで私一人が聞かれてゐるやうでありませんでした。でも之によつて眞實の自分を見出し、まして眞劍に如來様におすがりの出来ました事はごんなんにして嬉しくてならないので御座います。今迄長らく御上人様のお話を承つて居

りましたのに一体どこに聞いてゐた事かさほんごに申譯ないやら、口惜しいやらで御座います、そしてやつぱり模倣してゐたに過ぎなかつたさ今度はずり分らして頂いたと共に如何に自分が眞劍でなかつたさ云ふ事も知る事が出来ました。もう今はすべてがすつかりのびくくしてゐます、そして生々としてゐます。この興へられた大きな力と望みと喜びとを永久に私の日々の上に現はさして頂ける事を信じます。もう之からは御師匠の心をわすらはさなくてゆけるやうで御座います。有がたく御座いました。

今日は柏崎の渡邊様御母子のお出を頂き只今夜八時三十五分發にお見送りして歸へりました處で御座います。こうして道友にお逢ひ致します事この喜び又格別で御座いました。

○大阪 高橋きゆみ様より
御上人様
此度唐澤山上に置きましては有難き御教へ賜はりまして誠に有難う御座いました、厚く御禮申上ります。私は此度の御別時に際しまして私のお念佛が空でない

と云ふ氣持が致しました、いまではいづも空の様で、いつ私にも皆様の様な眞劍なお念佛ぶりが出来る様になるのか知らんと内心不安にも亦淋しくも存じて居りましたので御座いました。それが此度は最初の日から自分の申すお念佛に何となく力が入つて居る様な氣持がして居りました。そして廿九日のお念佛の中に明らかになり自分の行ひの悪かつた事を何處からともなく知りました。實に私は自分で決して悪くないと思ひつめて居りました事がはつきり自分が悪かつたのだと知りました時、濟まなくてくも涙が湧き出る様で御座いました。何だか恐ろしい様な眺つきかいた様な氣が致しまして、お念佛を止めてさめく泣きまじ

本當に私はこんごそは心からお念佛を信じました、私の様なもので敬慕して止まない如來様の御近くへこれ丈け歩んで来たと思ひます時、本當に嬉しくございませぬ。一耶も此度の唐澤山へ参加させて戴き本當によかつた心から喜び會社の歸り等入口からお念佛を申して入つ

て参りますので私の嬉しさは此上も御座いませぬ。ウツカリして居りますさ、直きに追ひ越されてしまひそう御座います。これもみなく如來様の御慈悲有難く存じ上げ居ります。

私達は富士身延電鐵にて東海道を廻りて歸阪致しました。大宮のあたり御上人様におすきな富士山が壓倒される様な莊嚴さにて私達に何ものか教へて居る様で御座いました。

お上人様には澁へ御出かけ遊ばしますさか、もはや東京には在はしませんわがも存じ上げます。時折り皆様の御噂も申上げますさいか此中は一晩中御學寮へ参つて居りました、そして奥様始めお子さま方にゆつくりとお目にかかりました、然し坊ちやまはほんごの赤らやんで居らつちやいませぬ。私おんぶさせて戴いて居りました時ヒョッコリ目が覺めてしまひました。ほんごに私ばかりの中がニッコリほ、及びました。實に氣持の買い朝で御座いました。

大阪は相變り暑う御座います。折角唐澤山で直しました汗も再び出さない様

一五

に苦心致して居ります。
未筆乍ら御奥様へ何卒よろしく申上げ
て下さいませ、時節柄御尊体御大切に遊
ばされます様御祈り申上げます。合掌
八月四日
○藤村よれ様より

○藤村よれ様より
當年は殊更の暑で御座いましたが、皆
様御機嫌如何渡らせ遊ばしますや、唐澤
よりおたより頂きまして厚く御禮申上ま
す、すゞ温泉のように伺ひ居りましたが
其の温泉の處を存せぬ爲御無沙汰申上ま
してお詫申上ます。當方は此夏は實に閉
口いたしました。友人親戚に病人多く其
の中二人迄死去いたし、それが西の宮
へ入にて日々に通ひつゞけて暑さの折柄
一しを感じました。併しまだ生かして頂
き人様のお世話が出来る事を感謝して
頂きます。又他に種々のオシメシを見た
り聞いたりいたしまして、實に人間がい
つ迄生ると思ふでの欲望が併し生人が爲
には無理からず悟る人、悟られぬ人まだ
くくらす世界のつづく事でしょう、救は
れつ、ある身を感謝いたします。合掌
○新潟縣見附町 今井善吉様より

御上人唐澤山は今年は隨喜出来ません
で残念でした。私も近頃ダン／＼眞の念
佛生活と云ふ様な事を眞面目に考へられ
る様になりました。

こゝで眞劍になつて念佛精進を致しま
したなら必ずアク抜けた無理のない生活
が出来る様な氣が致します。一時氣の抜
けたピールの様になつた私も、一日一日
と力が附いてくる様に思います。赤子が
一日と成長する様に澁温泉へ私も参り
たいと思ひます。けれど御盆前では今
参る譯にまいりません、長く御滞在の御
豫定ですか御伺ひ致します。淺野先生に
宜敷く 合掌

○伊勢 谷口年泰様より
本當に有り難いお別時でした。何かし
ら、新らし光が見られる豫感を持ちま
す。今度こそ更生の意氣を以て、もつと
／＼シツカリ立ち上りたいと思ひます。
お別時の中のみ教は元より歸途片岡様との
御法話を盗みき、本當にふるい立たれば
ならぬ／＼シミ／＼感じました。入信させ
て戴いてから既に四年半、もう一人立ち
出来ればならぬと思ひます。一層精進さ
せて頂きます。

御見送り申上げて直々山に引返しまし
た。大勢で申させて頂く念佛も結構でござ
いますが一人で申させて頂く念佛も亦
格別でした、身の毛もよだち目もあてら
れぬあの恐ろしさ、それこそまだ且て經
験せぬ恐ろしさでした。その中から入信
以來求めて得られなかつたお念佛らしい
お念佛が始めて申させて頂きました。
「もぬけはてたる聲の涼しさ」なるほど
本當にさうだなあ、さつ／＼有り難く
思ひました。申す念佛でなく申させて頂
くお念佛だと思ひました。「お夕飯です」
と呼ばれた時はもう止めればならぬのか
さうらめしく思ひました。

整朝山小屋に大山君を訪ねました。そ
して山を下り澁へ参りました。お上人様
にお逢ひして頂きたいと希つて居りまし
たが餘りおそくなりまして三日の晩澁
を立つて名古屋へ歸つて頂きました。
大内君は山小屋の一晚ですつかり變ら
れ陰險と申しますかあのものすこい顔が
平和な明るい顔に變つて居られました。
これまで殆んど働いた事はないが家へ歸
せて頂きます。

つたら働いて少し宛でもおやちに金を送
つて安心させてやらうと思ふて言つて歸
られました。後にはま／＼不安に感ぜ
られました。宛に角さうした元氣で歸
つて下さつた事は喜びです。今後の御指
導によつて追て良くなつて下さるものと
信じます。歸つてみますと見直さればな
らぬと悔ひ改めればならぬと一べい
です。

仕事が出積してゐますので餘は後便に
譲ります。合掌(八月五日)
○堺市 松浦卯之助様
殘暑御見舞申上ます。

半期以上の無音に打過ぎ申譯が有ま
せん。御許下さいませ。
奥様はじめ皆様には御變も無く御暮
と下さいます事を御便で拜見致してよろ
こび居ります。御上人には本年は特別御
健康の由大慶に存じます。

私方にお陰様で兩人共に無事に働かせ
て頂て居ります。御安心下さいませ。本
月の眞生で拜見致しましたが、御上人の
御心すくしの御便り今日は思出の深き日
で有ります。又は不景氣時の心得等に對

してしみ／＼と感ずさせて頂きます。
御仰せの通り懸命に職業に勉強させて
頂きますから御休神下さいませ。本年は
唐澤に行きましたつもりで宅で精進致して
居ります。

一度拜面をと思居りますが其の期を得
ません、いすれ上京の筋上致しまして
ゆる／＼と御話をさせて頂きます。

奥様に宜しく御傳へ下さいませ。合掌
○東京 土屋觀道
□あつ／＼あつ／＼と思つて来た夏の八月も
はやすぎで、今はもう九月の初めとなり
ました。いかに暑いと思つても、もう朝
夕は秋風のそよ／＼感じがして來ます。
道友の皆様にも其後御變りもありせんか、
遙に思い出しては御案じ申して居ります

□次に私共一同には其後も無事慈光裡中
に暮して居りますから乍ら他事御安神下さ
い。
□それにつけても此の八月中は各地の道
友の方々から、唐澤念佛會の御感想やら
或は日頃の御近況など御知らせ下さいませ
したのが殊の外多くて百數通に及びまし
たことは近年にないこととして喜びに堪

えないことでありました。

□乍然私はそれにもかゝらず殆どすべ
てと申してよいほどごなたへも御返信い
たしませんでした。これは深く御宥恕を願
ふ次第であります。實は一々御返事申上
げて御厚禮いたすのが本當であるばかり
でなく、さうでない多くの道友の方々にも
私からこそ一々御訪れ申上げるのが當
然であることへ存じ乍ら失禮いたしました
ことはまことに申わけもないことであ
ります。

○名古屋 榎木よれ

黒宮様の入信十年の
記念品を頂きよめる
と、せをはいそひまして念佛の
みしるしかけし老のうれしさ
行 夏
き、なれし木末の蟬の聲さへも
涼しくなりて夏ふけにけり
海 邊 松
打よする涙もしつかにすみの江の
つ、みか浦に松風のおさ

念佛三昧會御案内

日時 十月一日より五日まで
御指導 土屋觀道上人講演及座談
場所 岐阜縣大垣市西船町常樂寺

◎大垣驛よりは約十五丁 但シ乗合自動車(十錢)の便あり。
西大垣驛より約五丁、御宿泊及御食事の準備も致します。

右真劍に精進します道友各位御誘ひ合せ御結衆を合掌しま
す。

後援 大垣光明眞生會

誌代拂込者御芳名

○六拾錢 岐阜本覺院様 ○壹圓宛 鹿兒島内山清様、津島山城屋様、山口河村閑治
様、大阪坂井源吉様、全大山政子様、飯田今泉好人様 ○壹圓五拾錢 大阪古座谷
武兵衛様 ○貳圓 松戸岩品誠吉様 ○貳圓五拾錢 名古屋中野吉太郎様 ○四圓貳拾錢
和歌山小阪信孝様 十九、八、

(大正十四年八月十三日)

昭和五年九月十日印刷納本

第九卷第九號

(大正十四年八月十三日)

昭和五年九月十日印刷納本

第九卷第九號

本誌定價

一 部 金 十 錢 郵 税 共
中 年 金 六 十 錢 全
一 ヶ 年 金 一 圓 全

注文の注意

◎購讀希望者は代金を添へて御申込下さい
◎誌代は總て前金御拂込の事
◎送金は振替によるのが便利
です

昭和五年九月十日印刷納本
昭和五年九月十二日發行

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行兼 編輯人 土屋 觀道

名古屋市西區隅田町二一番地

印刷人 百々治之助
電話四(5)二九三番

名古屋市東區錦屋町二丁目

印刷所 龍山田活版印刷所
電話東(4)三六五・三五五

東京市芝區芝公園十四號地九番

發行所 眞生社

振替口座東京四七二八八番